Vol. 97

酉の市

— とりのいち —

節句人形 素朴なギモン

酉の市は 11 月の酉の日に、東京都台東区千束にある鷲（おおとり）神社をはじめ主に関東各地の社寺で行われる祭りです。境内に並ぶ色鮮やかな熊手や威勢のよい手締めは、冬の訪れを感じさせる風物詩。商売繁盛や開運招福を願うこの祭りは、江戸時代から人々の暮らしと深く結びついてきました。今回は、酉の市の由来や、熊手に込められた意味を解説します。

浅草にある鷲神社の酉の市は日本最大の規模と言われ、毎年大勢の人が訪れ、賑わいを見せる。昨年購入した熊手を返納する人も多くいて、周辺はごった返していた。

冬の訪れを告げる祭り

酉の市は、毎年 11 月の「酉の日」に、関東を中心とした各地の神社などで行われる伝統的な祭りである。「お酉さま」の名でも親しまれ、商売繁盛や開運招福を願う多くの人々が、毎年、縁起熊手を買い求めに訪れる。特に夕刻から夜にかけて境内は提灯や露店の灯りに包まれ、威勢のよい掛け声とともに独特の高揚感が生まれる。

酉の市は年によって開催回数が異なり、一の酉、二の酉、三の酉まで行われる年もある。三の酉まである年は火事が多いという言い伝えがあり、これは 11 月下旬に入り寒さが増し、火鉢や囲炉裏など火を使う機会が増える時期と重なることに由来すると考えられている。そのため酉の市は、福を願う場であると同時に、年末に向けて暮らしを引き締め、火の元に注意する心構えを新たにする行事としての側面も持ってきた。

熊手に込められた願いと由来

境内でひときわ目を引くのが、色鮮やかな装飾を施した熊手である。熊手は本来、落ち葉や穀物を集める農具であることから、「福をかき集める」縁起物とされてきた。金貨や米俵、宝船、お多福、鶴亀など、豊かさや長寿を象徴する意匠が数多く配され、それぞれに商売繁盛や家内安全への願いが込められている。熊手は毎年少しずつ大きなものに買い替えると運も育つとされ、前年の熊手を納め、新しい熊手を迎える行為そのものが、年の区切りを意識する儀礼ともなっている。

酉の市の起源には諸説あるが、現在の東京都足立区花畑にある大鷲神社で、農民たちが収穫を終えた感謝を神に捧げたことが始まりとされる。やがて江戸の町へと広まり、商人文化と結びつくことで、商売繁盛を願う祭りとして定着した。熊手を買い求める際に行われる手締めは、売り手と買い手が福を分かち合い、来る年の繁栄を願う象徴的な所作である。

江戸以来の風習でありながら、伝統的なデザインのものだけでなく、躊躇なく流行を採り入れ、新素材も使用してきた熊手と酉の市は、現代の若者たちにも支持され続けている。

カラフルな縁起熊手

監　　修　林直輝さん（日本人形文化研究所所長）
参考文献　福田 アジオ『知っておきたい 日本の年中行事事典』（ 2012 年、吉川弘文館）